

Rotary International District 2800

山形西ロータリークラブ会報

会長：遠藤 靖彦 幹事：武田 良和

地区目標

ロータリーにもっと誇りを
そして学び DEI の心を持って行動実践しよう

クラブテーマ

ロータリーを楽しみ、仲間と絆を！

◆点鐘：遠藤 靖彦 会長

◆ロータリーソング：国歌・蔵王を仰ぐ

◆司会：松本 定重 S.A.A.

◆会場：山形グランドホテル



第3040回例会

令和7年2月3日(月)

会長あいさつ

遠藤 靖彦 会長



今日は立春ということで、昨日、節分の行事をされた方もたくさんいらっしゃると思います。節分が近くなりますと一番にそれを感じるのは、テレビででん六さんのCMがたくさん流れることで、今年は「アウトサイド、インサイド」で、いろんなCMになっていたようです。毎年違うバージョンでいろんなものが出るのが大変楽しいなと思っております。

立春、立夏、立秋、立冬、これが季節の節目ということで「節分」というふうに言われております。その中でも立春というのが1年の始まりとして重視されたということから、新年の始まりとして邪気を払って新しい年を迎えるための行事としてこの節分ということで豆まきをするということのようであります。農業とも深く結びついていて、邪気を払ってという部分と五穀豊穡と祈りを込めたという意味もあるようですので、忘れた方はぜひ今日やっていただければと思います。

基本的には2月3日が節分だと認識しておりましたが、今年は違うということで、ただ、数年前にも2月2日の節分があったようです。あくまでも立春の前の日というのが節分ということのようであります。

さて、2月のロータリーのテーマが「平和構築と紛争予防」となっております。「平和構築と紛争予防」ということでロータリーとしてどのような活動をしているかということが私の認識として薄かったのでちょっと調べてみました。

ロータリー平和フェローということで、留学の補助金をもらいまして、海外留学をされている方がいらっしゃいます。大学での授業、そして国際組織へのインターン等々の活動をされているというロータリー平和フェローという立場でいろいろなご活躍をされている方がいらっしゃるということと、交換留学生の方々、元交換留学生の方々が各地で核廃絶とかいろいろな平和に向けた活動をされているということが、ロータリーとしていろいろなこの平和構築、紛争予防につながっているという考え方で取り上げられております。この「平和構築と紛争予防」に対してロータリー

としては、地域社会での対話、そして国際的な友情というものがこの平和構築や紛争予防につながるという考え方をもって、いろいろな活動を行っております。特に青少年の交換プログラムというものが重視されていわれているようであります。

元国際ロータリーの会長のカール・ヴィルヘルム・ステンハマーさんという方が、「すべての国の高校生が青少年交換プログラムに参加すれば、世界のすべての紛争はなくなる」というふうにおっしゃっていたことがあるようであります。そんなようなことから、ロータリーとして青少年交換プログラムにもだいが重きを置いて活動しているんだなという内容でありました。そのようなことを頭に入れて、2月いろいろな活動に参加していただければありがたいと思います。

本日は若干参加者が少ないようであります。皆さんにご協力いただいて、例会への出席を増やしていただければありがたいと思います。よろしく願いいたします、本日の挨拶とさせていただきます。

幹事報告

武田 良和 幹事

- 前回は報告いたしましたが、米山功労者第4回マルチプルということで坂部登会員に表彰状が届いております。おめでとうございます。



坂部登さん、遠藤靖彦会長

- 今月15日、IMが開催されます。グランドホテル14時登録開始ということで、41名の出席です。
- 今月のロータリーレートは154円です。

委員会報告

親睦・家族委員会

会員12名、奥様が8名、2月に誕生日を迎えられます。
おめでとうございます。

ニコニコBOX

〈2月3日〉

遠藤靖彦会長／本日の卓話

本日の卓話、細谷パストガバナーからはロータリーについて多くのことを教えていただいております。本日の卓話も大変楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

武田良和さん／節分

昨日は節分で、暦のうえでは春を迎えました。本年度例会も本日を入れてあと16回です。皆さま、これからの事業にさらなるご協力をお願いするとともに、どうぞたくさんニコニコをお願いしております。

戸田正宏さん／ありがとうございます

ここ3、4か月『ロータリーの友』に掲載されませんでしたが、今月はいつきさんから選んでいただきました。
“嘘つきの口がリンゴを かじりけり”。
ちなみに私はうそをつきません。

市村清勝さん／楽しく豆まき

昨日、月山鳥海山両所宮にて、楽しく豆まきをしてまいりました。でん六さんの豆をたくさんまいて、でん六豆を手土産にいただきました。むふふ。

細谷伸夫さん／機会をいただきまして

本日の卓話を賜るということで、老人の繰り言を聞いていただくことに感謝して。

会員卓話



ロータリーは実践哲学

細谷 伸夫 さん

《2004～2005年度 会長》

今日は卓話ということで、20年前の会長だから話をせよ、というようなことで言われてきたのですけれども、そうか、20年前かということで、20年前の西ロータリークラブはこうだったという、あるいはロータリーというのは昔こんなふうには輝かしい実績があるんだよなんていうことを話しようかなとは思って考えていたのですけれども、昨今のニュースを見ますと、アメリカとか日本では大変なことになっているなと思うと、頭にきたなということで心穏やかではないので、ちょっとそれについて少し文句を言いたいなみたいなのところの話をしたくなってしまいまして、そんな形です。今日はレジュメを作ってきてテーブルにお配りさせていただきましたので、それを見ていただければと思いますので、よろしくお願いします。

20年前というのは私が会長の時の2004年と2005年ですね。ちょうどロータリー創設100周年の時に当たりました。それで、わがクラブから豊田儀一さんというガバナーを輩出したということで、ガバナーの年度であって私も会長だということで、三重苦とは言いませんけれどもかなり厳しい年度でありました。

あまりしゃべるとあれなのですけれども、報道によりますと、今期のアメリカ大統領はフェイクニュースとか、脅迫とか、金の損得で社会を収めようというふうに思えてなりません。また、移民の国でありながら南米からの移民に対して強硬な行動に出ているということ、地球環境に携わるパリ協定から離脱するとの情報もありますし、ロータリーの発祥地であるアメリカはどうなったのだらうと、アメリカのロータリーは何をしたいんだらうと、ロータリーの創立から100年、今年で120年になるんですけど、その成果はアメリカでどうなっちゃったんだらうというようなことを考えております。

今の状況を考えますと、まるでロータリー創設時代のアメリカ・シカゴの社会を思い起こせるということでありまして。当時のアメリカは史上空前、今までにないくらいの大繁栄期を迎えていたということです。ギルデッド・エイジというらしいのですけれども、金ぴか時代といわれて、そこに登場する泥棒貴族といわれていた商人たちが闊歩していた町であったと。騙されるほうが悪いんだという詐欺と暴力、そして屠殺した家畜の廃油と骨を焼く煤煙とが空を暗くするほど充満する町で、その土地とか河川、大気が汚染されて、この悪臭と汚染の中で市民はかろうじて生きていたという状況でした。

一握りのにわか成金たちは社交界というものを作り、クラブを作って市民のことなど吹く風かということで、自分たちだけが豪勢な生活をしておりまして。まさに赤貧とこれ見よがしの贅沢が肩をすり合わせていると、並行していたというように表現されております。もっとも、クラブといってもイギリスのクラブと違ってメンバーの入れ替えが非常に激しく、カネが乏しくなると除名、新しい成金が入会するというのが現状で、そのたびごとにどの社交界では誰が入り誰が抜けたかという

一覧表が新聞を賑わせたようであります。泥棒貴族と政府というのが結び付き、賄賂は日常的、政治は金で動かされていたということで、腐敗しきっておりました。蛇足ですが、アメリカはこのようにすべてが、そしてすべての人がゼロからのスタートでありました。でありますから、誰でもいつかはということのアメリカンドリームが生まれたわけであります。しかし、そのために手段を採らない詐欺・暴力が横行したのであります。

ロータリー創設時のロータリアンはそのような中で、1907年、創立から2年経ちますけれども、市民を救うため、社会を改革するため、奉仕という形で行動を始めました。馬で巡回していた牧師さんの馬が死んでしまって困っていたというのを聞いて新しい馬を買ってあげたというのがロータリーでの最初の奉仕活動の始まりであったといわれております。シカゴの町に公衆トイレを建て、恵まれない子どもたちを助け、貧民街の住民に食べ物の詰まったバスケットを届けるなど、次々と奉仕のための行為を続けました。

一方、クラブの会員たちは、これでいいのかよ、というようなことで会員会社の改革が要求され、社長らの頭の転換を図るため、例会にて、今でいう会長挨拶や卓話を使って教育・指導を始めていました。正しい商売で市民を救い、社会を良くする。相手に喜んでもらえるような商売をしようじゃないかということで行動を開始したのでした。今でいう職業奉仕の考え方であります。当然これには大きな反発が何度も起きました。しかし、理念は少しずつ各クラブに広がり、1940年、創立から実に35年後でありますけれども、国際ロータリーは職業奉仕の目的を綱領の第2として宣言するに至ったのであります。1905年頃のアメリカの低俗で貪欲でそして腐敗に満ちた社会は、ロータリアンの今まで忘れられていた良心が汚職に戦いを挑み続けた結果、社会悪を規制する法律を次々と制定することになり、改善されていきました。このように、社会問題に対する挑戦と会員の利他的経営の意識改革の行動がロータリーの不動の基本的な目的になったのであります。今の社会奉仕と職業奉仕に当たります。

では、現代の日本はどうでしょう。戦争の恐怖、環境問題、疾病、家庭崩壊、子どもの自殺、外国人労働者問題、労働力不足、地方人口の減少、都市間の賃金格差、高齢者問題、SNSを使用の詐欺、強盗、殺人等々、多くの問題があります。社会問題に対して日本のロータリーは1907年頃のシカゴのロータリアンのように果敢に行動しているのでしょうか。社会の苦勞に関心がなく、ロータリーのなかったシカゴの町のように、自らの利益と豊かな生活に甘んじていることはないでしょうか。

日本の企業はどうでしょう。今、日本の大企業の不祥事が多すぎるとは思いませんか。それが10年、20年、30年も前から続いているものがあるということです。偽装報告、不正検査、個人情報の漏洩・目的外使用、労働情報の漏洩・不正取得、独占禁止法違反、下請法違反、パワハラ、セクハラ、その他のハラスメント、そして社員による横領、顧客財産の窃盗など、枚挙にいとまがありません。これらはすべて企業のコンプライアンスの問題なんです。発覚すると企業は社会的信用を失い、場合によっては立ち行かなくなる事態に陥ります。直近ではフジテレビの問題がいい例だと思います。よく企業体質の問題だといわれますが、それは長期間に渡るコンプライアンスの問題なのです。

コンプライアンスを重視する組織であるための処方箋というのをお話ししてみますと、1つ目は、組織の一人一人がその考えと行動を変えること。2つ目は、違反を迅速に察知し回復できる体制を組織として持つこと。3つ目は、いざ問題が起きたときは迅速かつ厳正に対応を取ること。適当な対応でお茶を濁してしまつては、従業員からも社会からも「所詮こんな会社か」と見られてしまいます。ロータリーの面から考えてみても3つすべてに通じるわけです。特に1つ目のトップの意識改革というのが重要な要素であります。こういう会社の社長さんとか支店長さん、役員の皆さまは多分ロータリークラブに入会しているのではないかと思います。そんな役員のいる会社がなぜ不祥事を起こすのか。ロータリーはなんの意味もなかったのか。誠に残念で仕方がありません。クラブは何をやっていたのかと問いたいところです。

ロータリーが目指すものは、会員個人個人がロータリーの心を持ち、活躍することを教え込むことです。その直接の担い手が個人が属するクラブです。クラブの役割はおのずと定まってきます。一言でいえば会員の教育です。クラブの最大の義務は所属会員の義務でありますから、その反射的な効果として、会員に教育を受ける義務が生じます。会員はクラブ会員としてクラブから教育を受けることが唯一無二の義務であるといえます。それゆえクラブへの出席というものが義務化されているのであります。クラブへの出席は単に会員と楽しむため、昼食を食べるためのものではなく、ロータリーの教育を受けるためのものであって、それ以外ではありません。

クラブ会長はどうあるべきか、自明だと思えます。1年を通じて常にクラブ会員に奉仕の心を芽生えさせ、活動させるための教育を実施することです。その小さな1歩が会長挨拶であります。ロータリーでは会員に対する会長挨拶はロータリーに関する事柄を話すべしとしているのもその故であります。そして会長は委員会に対し、会員が奉仕の心を醸成するようなプログラムを策定するようにしなければなりません。奉仕活動はクラブでやるのではなく個人でやるというのがロータリーの原則です。社会奉仕も個人でやることにしております。この社会奉仕は他人のために良いことを続けられれば少しずつ自分のためにやっていた心が他人のための心になっていくということです。言い換えると、自らに奉仕の心を植え付けさせるためにというものであるということが出来ます。ただ、私は社会奉仕というのはそれだけではなく、結果的に人々が助けられ、社会が良くなることも設立当時から求めていたような気がいたします。スコットランドの精神科の研究者は、親切な行為は人とのつながりを推進する最善の方法の1つのように見えますと言っております。2003年－2004年RI会長のゴードン・マッキナリーさんは、ロータリーの支援活動は奉仕する地域社会に変化をもたらすだけでなく私たち自身に変化をもたらすということだと話しております。

ロータリーの、そしてロータリーの会員の目指すものとしては、ロータリーの綱領というものがあります。そこにロータリーの綱領は有益な事業の基礎として、奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の事業を云々と書いてあります。皆さんが例会でよく歌う『奉仕の理想』という歌がありますけれども、そのことを言っております。この奉仕の理想というのは、綱領で初めて公式に出たのが実は1951年。それまでは「ロータリーとは何か」という基本的な問いかけに答えるものはありませ

んでした。それで目的は奉仕の理想であるということになったのですが、奉仕の理想というのがやっぱりなかなか難しいということで、わかりにくいなと。ただ、奉仕の理想とか奉仕の目的は何かを決めていかないと、実践をしてみるともなかなかできないところがあります。私は私なりの結論を出しております。それは「思いやる心」であろうと考えております。先ほど出ました R I 会長のゴードン・マッキナリー氏は「私の中核的価値観は一言で言えば思いやりです」と言っています。マッキナリー氏は「大事なのは奉仕活動です」とも言っています。そして思いやりの心で行動しようと鼓舞しております。

日本のロータリーを作った米山梅吉さん、米山奨学金に名が出てくる人ですね。例会は修行の道場であると言っております。その一方で、彼は外に出ては私財を投じて小学校を作ったり、ハンセン病、結核、がん研究所の助成をするなど、多くの社会奉仕活動をしてまいりました。まさに奉仕の実践を身をもって示したのであります。ガバナーは就任するためにアメリカで国際協議会というものに参加しなければなりません。これは全世界から全部のガバナーが、ガバナーエレクトですけれども、集まるということで500何名くらいいらっしゃいます。ご夫婦で来ると1,000名を超える大会議になるのですけれども、そこでは1週間にわたって会場に缶詰めになり研修をするのですが、その会場の入口に「入って学び、出でて奉仕せよ」という標語が掲げられています。例会で学び、外に出て学んだことを実践せよという意味であります。

話は変わりますけれども、R I はここ数年、増強、増強と言っております。私の年度の時も増強はあったのですけれども、ロータリーの増強を強調していますけれども、ロータリーの評価というのは数じゃないんじゃないの？と考えております。確かに多いことはいいことです。うちのクラブみたいに100名を超えるというのは素晴らしいことだと思いますけれども、ただただ多いだけでは評価は低いのであります。少人数でもきちんと奉仕活動をしていれば、そのクラブは宝石のように輝くのではないのでしょうか。

アメリカで、1800年後半の華やかな社交界が顔を聞かせていた頃、先ほど話した頃ですね、それを苦々しく思っていた男がいました。金融王としてモルガン財団を作ったジョン・ピアポント・モルガンです。彼は大財閥の代名詞となるだけの富豪でしたが、ニューヨークの邸宅は質素でニューポートの別荘も贅沢な別荘ではなく、派手なパーティーも開きませんでした。しかし、上流社会を否定したわけではありません。むしろ自分たちこそはえぬきのエリートであるというようなことで、最近の社交界は成り上がりの集まりであると思っておりました。本当の上流社会は決して自分から宣伝したり見せびらかしたりはしないのだと考えております。19世紀のアメリカでは多くのクラブが作られましたが、モルガンは飽き足らず、クラブは功利的であり、クラブでビジネスの話をし、クラブの付き合いをビジネスに利用していると、モルガンは純粋な人間の交歓の場であるとしてクラブを作るべきだと考えておりました。モルガンは、クラブとは仕事から離れ、精神的なことについて語る場であ

るべきだと考えていたようです。そこではビジネスの話はなし、話は人間の精神的文化的向上について交わされるべし。選ばれた人々が世界を救うと考えておりました。このモルガンの考えと実践というのはロータリーと軸を一にするとところがあるかと思っています。ちなみにモルガンが作った1870年のクラブというのは秘密クラブでありまして、13人だけいまして、ゾディアッククラブといいまして、聞いたことがあるかもしれません。ゾディアッククラブというクラブであります。

ロータリーの精神、あるいはロータリアンの資質について、よく引き合いに出される言葉に「ノブレス・オブリージュ」という言葉があります。このノブレス・オブリージュというのは、フランスの貴族ピエール＝マルク＝ガストン・ド・レヴィ侯爵がナポレオン1世の時代に数々のにわか貴族が生まれたのを見て、古来の貴族のあり方について訓戒を垂れたものであります。その意味は「高貴な責務」、「エリートとしての義務」というものであります。すなわち、貴族などに代表される高貴な身分の者は、社会全体に対して果たすべき、果たさなければならぬ責務が伴うという意味であります。戦乱の世では軍務、平和な時代には国や地方に住む人々の生活を豊かに快適にするための責務といわれております。この考えは古代ギリシア、ローマ時代からあったものであります。この考えで富裕で社会のリーダーを自負しておりますロータリアンが徳を積み、社会をよくする活動をすべし、あるいはするべき義務があるとするロータリーの精神に相通じるところがあるかと思います。ロータリアンの責務は「ノブレス・オブリージュ」であるといわれる由縁であります。ノブレス・オブリージュの精神からは、何もしない、奉仕もしないということは、無責任、怠惰、卑しい、自分勝手と軽蔑されておりました。ロータリーの精神でも当てはまるような気がいたします。

このようにロータリーで大切なのは理屈ではなく、単なる知識や理念や、ましてや肩書きではありません。何回も言いますが、実践です。ロータリーは実践哲学であるのです。例会に出席し、卓話を聞き、会員と交流を深めること。これは奉仕活動のために最低限として必要であり、有益であることは間違いありません。しかし、これがロータリーのすべてではありません。ロータリーの根底にあるプロテスタントの教義では、カソリックとは異なり商売をして大いに儲けるのはいいでしょうと。ただ、その稼ぎは社会と神のために使いなさいというふうに教えております。ロータリーは自分の利益のためではありません。自分の利益は商売で稼ぎなさい。ロータリーは外に向かって他人のために行うものです。このことをしっかり肝に銘じていかなければならないと思っております。例会で学び、社会に奉仕しましょう。ロータリーの究極の目的はやはり社会をよくすることというふうに思っております。山形西ロータリークラブのメンバーはこのことを考えるべきで、そうすれば県内どころか世界に輝くロータリークラブになるかと思います。輝きましょう。自分のため、社会のため、そして人類のために。ありがとうございました。

本日出席（2／3）	会員総数	出席会員数
	104名	58名